



後宮の細殿 : その特質と役割をめぐって

天野, ひろみ

(Citation)

國文論叢, 50:1-12

(Issue Date)

2016-03-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/E0041127>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/E0041127>



後宮の細殿

——その特質と役割をめぐって——

はじめに

— 細殿とは何か —

『源氏物語』花宴巻は光源氏と朧月夜の君の出会いを描く巻である。彼らの出会いの場面は次のように語られる。

源氏の君酔ひ心地に、見すぐしがたくおぼえたまひければ、上の人々もうちやすみて、かように思ひかけぬほどに、もしさりぬべき隙もやあると、藤壺わたりをわりなう忍びてうかがひ歩けど、語らふべき戸口も鎖してければ、うち嘆きて、なほあらじに、弘徽殿の細殿に立ち寄りたまへれば、三の口開きたり。女御は、上の御局にやがて参上りたまひにければ、人少ななるけはひなり。奥の柩戸も開きて、人音もせず。かやうにて世の中の過ちはするぞかしと思ひて、やをら上りてのぞきたまふ。人はみな寝たるべし。いと若うをかしげなる声の、なべての人とは聞こえぬ、「朧月夜に似るものぞなき」とうち誦して、こなたさまには来るものか。いとうれしくて、ふと袖をとらへたまふ。女、恐ろしと思へる気色にて、「あ

天野 ひろみ

なむくつけ。こは誰ぞ」とのたまへど、「何かうとましき」とて、

深き夜のあはれを知るも入る月のおぼろけならぬ契りとぞ思ふ

とて、やをら抱き降ろして、戸は押し立てつ。

(①三五六頁)

「二月の二十日あまり」、桐壺帝は南殿で桜の宴を催した。宴の終了後、光源氏は人々が寝静まったのを見計らい、藤壺中宮との密会の機会を期待して彼女の住まいの辺りをうろつくが、戸も厳重に閉ざされており、その機会もなかった。諦めきれない光源氏は今度は弘徽殿の細殿に立ち寄るのである。弘徽殿は光源氏と敵対する女御の住まいである。この時は「女御は、上の御局にやがて参上りたまひにければ」とあり、女御は不在である。光源氏がこの敵対する女御を主人とする殿舎に近づいたのはなぜだろうか。

細殿は『大内裏図考証』巻第一七でも言及される空間である。

『考証』では麗景殿東廂の説明として『清慎公集』『公任集』と「りかへばや物語」の麗景殿細殿の例を引用する。同様に登花殿西

廂の説明としても『西宮記』『大鏡』の登花殿西廂の細殿の例を挙げ、また弘徽殿西廂の説明としても『西宮記』『三長記』『金葉和歌集』『源氏物語』『栄花物語』『枕草子』二条皇太后宮大式集』の細殿の例を挙げる。このことから、『考証』では麗景殿東廂、登花殿・弘徽殿の西廂を細殿だと理解していたと考えられる。宣耀殿東廂については、『考証』では宣耀殿の説明の冒頭に『栄花物語』巻第三四「暮まつほし」の細殿を含む用例を引用するものの、東廂の項目で細殿の例を挙げることはない。しかしながら、萩谷朴氏は「枕草子解釈の諸問題（8）」⁽¹⁾において、『考証』のこの例が（宣耀殿東廂⇨細殿）であることを立証するものと解する。その萩谷氏の論を受けて石田穰二氏は論文「細殿について」の冒頭で、細殿が一般に麗景殿・宣耀殿の東廂、弘徽殿・登花殿の西廂を指すことは「動かぬ所」と述べている。一方、『倭名類聚抄』では「廊」のことを「唐韻云廊音郎（和名保曾止乃）殿下外屋也」（元和古活字那波道圓本巻一〇・居所部第一三・居宅類第一三六。引用は『諸本集成倭名類聚抄』（臨川書店）より）と説明する。この説明により『倭名類聚抄』が廊を細殿と解釈していたことが読み取れる。また、『源氏物語』の古注釈『河海抄』（貞治年間（一三六二〜一三六八）成立）でも「ほそとのは廊也」と（細殿⇨廊）とする説を採用している。⁽³⁾ところが、平安期の用例などでは、「廊」は本殿とは別の細長い建物のことを指す言葉となっており、⁽⁴⁾殿舎内部の廂と解する『大内裏図考証』の説とは相反する。『河海抄』では、説を補強する用例として『万葉集』の例を挙げる。『万葉集』本文には「大臣参議并せて諸王は、大殿の上に侍はしめ、諸卿大夫は、南の細殿に侍はしめて、則ち酒を

賜ひ肆宴（しえん）したまふ」⁽⁴⁾（二六〇頁）とある。この場合、細殿は大殿とは別の建物であったと考えられる。『小右記』長和元（一〇二二）年六月二十九日条に「左府虹立三箇所、（細殿・北面・厩等）」（大日本古記録）とあり、平安期の貴族の邸宅でも別の建物と思しき細殿の用例が確認できる。しかし、後宮の細殿については、『源氏物語』の記述を見る限りでは、別の建物とは考えにくい。光源氏が朧月夜の君を細殿に「抱き降ろし」たという点で本殿と繋がっていると想定されるからである。この理由から、本稿では後宮の細殿を各殿舎の裏側の廂の部分と特定して考察を進めることとする。⁽⁵⁾

後宮の細殿⇨廂という説に従ってその用例を確認すると、この空間は他の廂とは異なつた役割を担っていたことがわかる。『枕草子』の作者清少納言は七三段において、「うちの局、細殿いみじうをかし」（二二七頁）と述べる。また、『栄花物語』巻第三一「殿上の花見」には、女院となつた彰子が内裏に入御した際に「女房ぞ弘徽殿に局して下り上りける。めぐらしき細殿住みもをかし」⁽³⁾（二二〇頁）と記されており、細殿が女房たちの局に使用されていたことが読み取れる。『更級日記』には、後朱雀天皇の皇女祐子内親王に仕えることとなつた作者が彼女に従つて内裏に入る場面があるが、その宮仕えの記の中に、「その夜はしもに明かして、細殿の遣戸を押しあけて見出したれば（後略）」（三三七〜三三八頁）という記述がある。この表現は作者の下局が細殿内にあったことを窺わせる。

さて、細殿が女房の局を有する空間であつたことから考えると、『源氏物語』において光源氏が弘徽殿の細殿に近づいたのは、そ

ここに住む女房が目的だった可能性が高い。光源氏の目的は明確にはされないが、『源氏物語』前後に成立した作品では、殿上人が女房と語りうために細殿を訪れる光景が随所に見受けられる。そこで本稿では、女房の局となる細殿に着目し、物語における細殿の役割を考察していく。

一、後宮の細殿の特質

まず、後宮の細殿の特質を考えてみる。『更級日記』には「かたらふ人どち、局のへだてなる遣戸を開け合せて、物語などし暮らす」(二三三—二三三三頁)とあり、女房たちが局の隔てを開けて語り合った様子が記される。細殿の内部は遣戸によつて幾つかのスペースに区切られていたのだろう。

また、細殿で語り合う女房たちの姿はその他の作品でも確認できる。『枕草子』では「細殿に人あまたるて、やすからず物など言ふに」(四四段)と多くの女房が細殿に集まって物語をする様子が語られる。『続詞花和歌集』(第三・夏)一一一番歌の詞書には、「後朱雀院御時、うめつぼの女御御方の人人ほそどのにうへの人人と物がたりして侍るに」(『新編国歌大観』)とあり、異なる主人に仕える女房たちが細殿で交流していたことを窺わせる。細殿は単なる個人部屋の集合体ではなく、宮中に仕える女房たちの交流空間としても機能していた。

一方、細殿の内と外で男女が交流することもあった。『枕草子』七三段には、

三尺の几帳を立てたるに、帽額のしもただすこしぞある、外に立てる人と、内にゐたる人と物言ふが、顔のもとにいとよ

く当りたるこそをかしけれ。

とある。また、この段において清少納言は細殿の魅力を次のように語る。

かみの葷上げたれば、風いみじう吹き入りて、夏もいみじう涼し。冬は雪、霰などの、風にたぐひて降り入りたるもいとをかし。せばくて、童べなどののほりぬるぞあしけれども、屏風のうちに隠しすゑたれば、こと所の局のやうに、声高くえ笑ひなどもせで、いとよし。昼などもたままず心づかひせらる。夜はまいて、うち解くべきやうもなきが、いとをかしきなり。(一二七—一二八頁)

清少納言が語る細殿の魅力をまとめると、

一、夏は風が入つて涼しく、冬は雪・霰などが風と共に入つてくるのがおもしろい点

二、童などが入つてきてもうるさくしない点(中宮の御座所に近いからか)

三、人通りが多いため、昼も夜も気を抜くことができな点となる。三田村雅子氏は清少納言が細殿を賞賛する理由を次のように分析する。

細殿という名称を持つ女房の局が、通路にも外気にも面した細長い生活空間で、屋内と云うにはあまりに不安定なあやうさを抱え持っていたからにはかならない。通路を行き来する男達の世界とも、外界の気候条件からも十分に隔離されない無防備な境界性が細殿の生活の特徴づける。生活環境としてはむしろマイナスな居心地悪さを、その不安定さ故に枕草子は選んでいるのである。

細殿の局は中宮の御座と接するが、反対側では外界とも接する独特の空間であった。清少納言は細殿で外の空気を感じ、そして通行する男性とのコミュニケーションを楽しむ。二二一段では、

細殿の遣戸をいとう押しあげたれば、御湯殿に馬道より下りて来る殿上人、葵えたる直衣、指貫の、いみじうほころびたれば、色々の衣どものこぼれ出でたるを押し入れなどして、北の陣ざまに歩み行くに、あきたる戸の前を過ぐとて、纏を引き越して、顔にふたぎていぬるもいとをかし(三六九頁)

とあり、清少納言が細殿の戸を開けて男性たちを観察している。清少納言がこの段において語る細殿は、中宮定子の住む登花殿の細殿であったと考えられる。弘徽殿と登花殿の西側は清涼殿と北の陣を結ぶ通路となっていた。そのため、他の殿舎の細殿と比べて人通りの多い空間であった。『枕草子』四四段では清少納言たちが通りかかる男性たちに声をかけている。

細殿に人あまたゐて、やすからず物など言ふに、清げなる男、小舎人童など、よき包み、袋などに、衣ども包みて、指貫のくくりなどぞ見えたる、弓、矢、楯など持てありくに、「誰がぞ」と問へば、ついゐて、「なにがし殿の」とて行く者はよし。けしきばみやさしがりて、「知らず」とも言ひ、物も言はでいぬる者は、いみじうにくし。(一〇二頁)

ここでは、素直に返答する男性を「よし」とし、「知らず」と答える男性や無言で立ち去る男性を「いみじうにくし」とする。細殿で気の利いた対応ができるかどうかで男性が評価される。会話下手な男性にとっては避けて通りたい空間であろうが、その一方で、女房とのコミュニケーションを求める男性たちにとっては、

細殿は格好の空間であったと言える。

その他の用例を確認すると、まず『今昔物語集』巻第一五「義孝少将往生語第四二」に次のような記述が見られる。

有明ノ月ノ極テ明カリケル夜、弘徽殿ノ細殿ニ女房三人許居テ物語ナドスル間、義孝ノ少将、欄装束ヨカニテ、殿上ノ方ヨリ来ニヤ有ラム、細殿ニ来テ女房ト物語スル様、現ハニ「故有ラム」ト見エテ、「墓無キ事ヲ云フニ付テモ道心有ルカナ」トゾ思エケル。(②一一二頁)

引用は弘徽殿の細殿で二三人の女房が語り合っているところに殿上の方から義孝少将がやってきてその女房たちと物語するという場面である。さらに、『更級日記』では、祐子内親王と共に宮中に参内した作者が細殿で男性(御物本傍注によれば源資通)と会話をしている場面があるが、そのくだりにも、「読経の人は、この遣戸口に立ちとまりて、ものなどいふにこたへれば」(三三八頁)と、男性が「もの言ふ」様子が確認できる。

以上の点から、細殿は局を有する空間というだけでなく、女房同士の語らいの場であり、女房と男性の交流の場でもあった。ここでは「もの言ふ」「物語す」という行為が求められた。女房の集まる細殿は男性官人が女房たちとの会話を楽しむ空間であり、そこでのやり取りが宮中の文化を育んでいたと考えられる。

二、後宮の細殿の役割

さて、冒頭に示したように細殿は宣耀殿・麗景殿の東廂、登花殿・弘徽殿の西廂とするのが通説となっているが、そのうち麗景殿と登花殿については『源氏物語』以前の文学作品でその例を確

認することができる。このうちの二つ、麗景殿の細殿は特に私家集の詞書の中に幾つか登場する。

①『義孝集』二九・三〇番詞書（以下、引用はすべて『新編国歌大観』による）

ほりかはの中宮にて、ゆきのふりたるつとめて、れいけい殿のほそどのの、かれたるすすきにゆきふりかかりたるを、とのもつかさしてさしいれて、弁の少将のきみ、たてまつれたまふとて、それにむすびつく

②『大式高遠集』九一・九二番詞書

堀川の中宮にむまこそといふ人さぶらひき、ゆゑありてことをかすひひき、こゑいとおもしろくて歌などもうたひ人にくころにくくおぼえたりし人なり、あきの月いとあかきによぶかくふえをふきて、れいけい殿のほそどののまへをわたれば、ことひきてむまこそがるたりけるをしらずがほにていけば、かくいひかく

③『公任集』二〇八・二〇九番詞書

冬つかたれいけい殿のほそどののなぞいひけるほどに、くら人これすけからのつかひにてくだるまかりまうしせむとて、御ものいみにこもるひ、あけてのとしかうぶり給ひけるべければやがてうへにもさぶらふまじきよしひければ①②の堀川の中宮とは円融天皇の后となった藤原兼通の娘―皇子のごのである。『采花物語』巻第一「月の宴」、巻第二「花山たづぬる中納言」によると、天禄二（九七二）年（『日本紀略』では天禄四（九七三）年）に入内し、天延元（天禄四年・九七三）年七月に中宮となったが、天元二（九七九）年に病により薨去して

いる。ちなみに、『義孝集』の他の部分をみると、二四番歌と四六番歌の詞書にも「ほりかはの中宮」に仕える女房との会話が確認できる。③の「くら人これすけ」は藤原伊祐のことである。公任はこの時藏人頭であり、彼の上司に当たる地位にいた。伊祐は唐船がもたらした品の検査・買い付けの使として筑前に旅立つ予定であった。永祚二（九九〇）年一〇月のことだという。ただし、『公任集全釈』では、「冬つかたれいけい殿のほそどののものなどいひけるほどに」の表現は別の部分の詞書が混入した可能性が高いとする¹⁰。その場合、時期が判定できず、この「れいけい殿」の女主人を特定することは難しい。仮に『公任集』の編集通り永祚二年のことだとすると、当時は一条天皇の御代で、麗景殿に居住していたのは皇太子居貞親王（後の三条天皇）の妃で尚侍の藤原綏子（藤原兼家の娘）であった。綏子の細殿のことは『采花物語』巻第四「みはてぬゆめ」でも殿上人の多く集まる場所として紹介される。

麗景殿いと時にしもおはせねど、ただおほかたもの花やかに気近うもてなしたる御方のやうなれば、心やすき物語所には、殿上人などの御方の細殿をぞしける。この女御の御方をばいと奥深く恥ずかしきものに言ひ思ひけり。

（①一八六―一八七頁）

麗景殿は弘徽殿に匹敵する殿舎である。皇子も綏子も権勢を誇る家の娘であったため、麗景殿居住は不自然ではないが、皇子は円融朝前半、綏子もまた三条天皇の皇太子時代のわずかな期間の居住であった。皇子は中宮という地位を得たが、綏子の場合には前の『采花物語』の引用にあるように、時めいた妃ではなかった。し

かし、彼女たちの女房の居る細殿は殿上人の立ち寄る空間として記録され、後宮の繁栄の一翼を担っている。

清少納言が『枕草子』において語る細殿は、中宮定子の住む登花殿の細殿であったと考えられる。弘徽殿と登花殿の西側は清涼殿と北の陣を結ぶ通路となっていた。そのため、他の殿舎の細殿と比べて人通りの多い空間であった。『源氏物語』では登花殿は「埋もれたりつる」（賢木②一〇一頁）殿舎と記され、マイナスイメージの強い空間であったが、『枕草子』の舞台となった時期には女主人・定子の魅力と清少納言の活躍によって華やかな状態を保っていたと想定される。定子の細殿については、『茶花物語』巻第六「かかやく藤壺」に、

故関白殿の御有様は、いとものはなやかに今めかしう愛敬づきて気近うぞありしかば、中宮の御方は、殿上人も、細殿つねにゆかしうあらまじげにぞ思ひたりし。（①三〇二頁）

とあり、こちらも殿上人を惹きつける細殿であったことが語られている。

細殿の活気はその殿舎の女主人の評判にも繋がった。細殿の間が宮中で大きな役割を持っていたことは、『紫式部日記』において作者が、競争相手のいない彰子御所を危惧するくだりで、「その御かた、かの細殿と、いひならぶる御あたりもなく」（一九五頁）と「細殿」を競争相手のいる場所として言及していることから窺い知ることができる。競争相手はキサキたちばかりではない。細殿に住まう女房たちも宮中におけるキサキの評価に繋がる。紫式部は彰子やその女房たちに競争相手のいない状態が女房たちの気の緩みに繋がっていると指摘する。殿上人を惹き付ける

女房の輩出が彰子サロンの課題であったにちがいない。

三、物語における細殿女性の系譜

——名のりをしない女性の場——

前段までの考察において、細殿が女房の局を有する空間であったことを確認したが、『源氏物語』の用例ではそのことを直接読み取ることができない。『源氏物語』の用例は光源氏と朧月夜の君の密会の場として登場するのみである。

さて、この光源氏と朧月夜の君との密会の別れの場面には、次のような歌のやり取りがある。

（源氏）「なほ名のりしたまへ。いかでか聞こゆべき。かうてやみなむとは、さりととも思されじ」とのたまへば、

（女）うき身世にやがて消えなば尋ねても草の原をば問はじと思ふ

と言ふさま、艶になまめきたり。（源氏）「ことわりや。聞こえ違へたるもじかな」とて、

（源氏）「いづれぞと露のやどりをわかむまに小篠が原に風もこそ吹け

わづらはしく思すことならずは、何かつつまむ。もし、すかいたまふか」と言ひあへず、人々起き騒ぎ、上の御局に参りちがふ気色どもしげく迷へば、いとわりなくて、扇ばかりをふるしに取りかへて出でたまひぬ。

（①花宴三五七〜三五八頁）

この場面では正体を問う光源氏に朧月夜の君が歌で応答した形となっているが、歌を詠みかけたのは朧月夜の君の方が先である。

正体を知りたければ自分で探せという挑戦的な歌である。この歌の内容や先に歌を詠みかけるといふ行為から朧月夜の君の積極的な性格が読み取れる。

細殿という場を舞台とした恋愛、それは後宮の出入りを許された身分でありながら、気軽に歩ける立場にある男性（良家の公達の主であると思われる）と、そこに関係する女性（多くは女房の立場にある女性）といった組み合わせであることが多く、その場合は行きずりの関係で終わるのが通例であったのだろう。次に挙げる『本院侍従集』の冒頭にもそのような男女の恋愛が見られる。以下に挙げる文章は藤原兼通と思しき男性¹²と村上天皇の皇后である藤原安子に仕えた本院侍従との歌と詞書きである。

おぼえおはしけるかんだちめのじらうなりける、まだとし十
八ばかりなりけるが、おぼえいとかしこかりけれど、かうぶ
りえぬ有けり。おほぢは太政大臣にてなんおはしける。いも
うとは、さきばらのみこにたてまつりて、藤つばにぞさぶら
ひ給ひけり。をなんいとさぶらひたまひけり。其子の侍従
きみ、思ひかけ給ひて、かく詠みていれたまへり

色に出て今ぞ知らする人しれず我がおもひつるふかき
こゝろを

などのたまひて、「御里はいづくぞ」とのたまひければ、女
ほう殿にて物などいふに

我宿はそこともなしかおしふべきいほでこそ見め尋けり
やと

おとこ

我思ひ空の烟とたぐひなば雲井なりとも猶たずねてむ

（本文は『本院侍従集全釈』（底本 松平文庫本）

この本文には「ほう殿」とあるが、「う」は諸本「そ」となっている。¹³『本院侍従集全釈』（以下『全釈』）ではこの箇所について、「うはそを見誤ったと見る」と説明している。本稿でもそれに従い、「ほう殿」を「細殿」と解釈する。この場合、男性は里を尋ねているだけで、朧月夜の君の場合のように正体不明というわけでもなさそうであるが、それでも男性の問いに対して、知りたければ自分で探せと歌で言い切る本院侍従の態度は朧月夜の君を彷彿とさせる。

細殿を舞台とする物語は『源氏物語』以後も見られる。まずは「麗景殿の細殿」が登場する『とりかへばや物語』の例を確認してみたい。

御随身のたち遅れて参れる、申すべきことあり顔に気色ばみ
て候へば、「何事ぞ」と問はせたまへば、「麗景殿の細殿の一
の口」にうち招きとどめて、「参らせよ」とはべりつる」とて、
いみじう艶なる文取り出でたり。「あな、おぼえな」とて見
たまへば、

逢ふことはなべてかたきの摺衣かりめに見るぞ静心なき
と、いとをかしげなるを、あやし、誰ならんと、うちほほ笑
まれて、騒がしければ返事もせず。情けなくやと、いとほし
さに、こと果ててみな人も静まりぬるに、夜深き月のいと明
かく澄めるに麗景殿の細殿をとかくたたずみて、

逢ふことはまだ遠山の摺目にも静心なく見ける誰なり
とうそぶくに、人声もせず。人もなきにやと思ふに、文出だ
しつる一の口に、

めづらしと見つる心はまがはねど何ならぬ身の名のりを
ばせし

と答へたる気色も、なべてならずをかしかんなり。立ち寄り
て、

「名のらずは誰と知りてか朝倉やこのよのままも契り交
はさん

こや、かたきの摺衣なりける」など、そこはかとなく言ひす
さむけはひの、近まさはたなつかしういみじく愛敬づきた
るを、いとど心にしみてをかしと思ふに、のどやかに立ちた
まへる、いかがあらんと、いとつつましようやましけれど、
世の常のさまに乱れ入りなどすべうもあらず。

(巻第一・一九六―一九七頁)

この場面は男装の女主人公・中納言が麗景殿にいる女性と歌を交
わすくだりである。この女性は「女も、女御の御妹やうの人なる
べし、なべての気色ならずと見知るれば」(一九八―一九九頁)
とあり、麗景殿女御の妹といった人で並の身分の女性ではなかつ
たため、中納言も言葉を交わしたことが語られる。この女性に関
してはすでに指摘されているように「麗景殿女御の妹」という点
で『源氏物語』の花散里を想起させるが、一方で「細殿」は朧月
夜の君を意識させる。朧月夜の君は初登場の場面ですら歌を詠み
かけており、その積極的な性格が示されていたが、この「とりか
へばや物語」の細殿の女性は中納言のためにわざわざ文を用意し、
隨身を招き留めるという行動力を見せており、その点では、男性
側のアプローチによって歌を詠む朧月夜の君や本院侍従よりも積
極的である。しかし、その性格は男性に対して挑戦的といったも

のではなく、自身の身を卑下する女性であり、その点で『源氏物
語』の朧月夜の君とは異なった性格の女性として造型される。女
御の妹らしき女性ということであるが、男主人公との仲は「ざり
ぬべき折々は忍び忍びに語らひたまふ」(巻第四・五一九頁)と
いうもので、正式な妻でなかった点を考慮すると、その扱いは軽
いものであったと言えるだろう。現実社会において細殿が女房の
局を有する空間であったことがこの物語にも影響したのでろうか、
この女君はさも女房の一人であるかのように造型されている。
『源氏物語』では明確には示されなかった女房の空間としての細
殿が「とりかへばや物語」では強く意識されることとなる。

さらに、同じく男装の女主人公が活躍する『有明の別れ』にも
細殿が登場する。

八月十五夜の月の宴ありて、例の暁近く紛れ出で、御許され
難き御いとまなれば、人に知られず忍びたるかたより逃れ出
で給ふに、承香殿の細殿の前を過ぎ給へば、入りがたの月影
に山の端近くなりて隈なき光なれども、こなたは物の陰にて
ことに掲焉ならねど、いと著き御姿を例のえ見過ぐさで、御
隨身なども数多からず、先も追はせ給はぬに、例よりはひま
ある心地して、御簾をいたく押し張りたるは、あやしと目と
どめ給へるに

時の間も袖に移して馴れ見ばや雲居に過ぐる月の光を
といふ声、いと若やかにあてに聞ゆるも、誰ばかりと憎から
ず。

雲居にてうはの空なる月影をいづれの袖と分きて尋ねん
とて、しばし立ちどまり給へるは、いかばかり珍しからん。

（大槻脩『在明の別』（桜風社・昭和四五年六月）七四頁）

『有明の別れ』でも細殿を通り過ぎる主人公に女性の方から歌を詠みかけるといった設定であり、この点は『とりかへばや物語』の展開を踏襲したものと見られる¹⁵⁾。

前述した用例を整理してみると、細殿女性に共通するのは、男性が女性の正体を知らない（女性は男性のことを知っている場合が多い）点、そして女性側から歌を詠みかける点である。物語の細殿は行きずりの男女の交流の場であり、そこに関係する女性もまた積極的な一面を持つ人物として造型される傾向にある。

四、密会空間としての細殿

『源氏物語』に登場する細殿は、女房の局を有するという役割をほのめかしてはいるが、実際に女房のいる細殿を描くことはなかった。『源氏物語』の細殿は女房の生活空間としてではなく、朧月夜の君と光源氏との密会の空間としてクローズアップされる。

尚侍の君は、人知れず御心し通へば、わりなくもおぼつかなくはあらず。五壇の御修法のはじめにてつしみおはします隙をうかがひて、例の夢のやうに聞こえたまふ。かの昔おぼえたる細殿の局に、中納言の君紛らはし入れたてまつる。

人目もしげきころなれば、常よりも端近なる、そら恐ろしうおほゆ。
（賢木卷②一〇五頁）

朧月夜の君は尚侍となり、姉皇太后の居所であった弘徽殿に引き続き住まうことになる。朧月夜の君は主人として別の空間に住みながら、密会の際は細殿の局に移動していたことが記述から窺える。

密会を描く物語において、男性が女性の居所に赴くことは多いが、女性の方が移動することは稀である。記述にはないが、朧月夜の君が移動したことは「常よりも端近なる」という表現から判断できる。逢瀬は彼女の常の居所ではなく細殿で行われたのである。そしてこれ以後、細殿は女房の空間であると同時に密会空間としても使用されるようになった。

『我が身にたどる姫君』巻四には次のような記述がある。

日ごろ降りつる雨のなごりなく晴れて、月の隈なきに例のよほさるるにや、そこはかとなく内わたりもゆかしうて、いといたう忍びて大将参り給へれど、大殿籠りにければ、なかはといとど隠ろへ出でなむと思すに、麗景殿の細殿わたり、例のほめき給ふに、寝ぬけはひしるければ、上人どももしき見つるに、わづらはしけれどしばし立ちどまり給ひつ。とかくたばかりて、ただ夢ばかりなる御けはひ、いひ知らず心深き御仲らひには、何ごとをかまねび出でむ。

（中世王朝物語全集20 我が身にたどる姫君上『二〇七頁』麗景殿女御に恋する右大将（もと殿の中将）がついに彼女との密会を果たす場面である。右の引用では麗景殿の細殿は「上人ども」も集まる女房の空間として登場しているが、後の記述では、大将も、うち続きまぎれしほどに、細殿の旅寝にだにかき絶えて、いとど慰む方なく思ひ乱れ給ふ。）
（二二二頁）

とあり、右大将と女御の逢瀬の場所が細殿であったという事実が判明する。また、細殿はその後二人の逢瀬を婉曲的に示す言葉として使われるようで、麗景殿女御が不義の子を産産する際に左大将（もと殿の中将）を思い出すくだり（巻五）では、

御手洗川の褌も、ただ我が御上にのみ思ひ知られ給ひけるほどは、いふかひなき細殿の心尽くしも絶え間久しからず、同じ心なりけるを、

〔中世王朝物語全集21 我が身にたどる姫君 下〕四〇頁

とあり、彼が後年麗景殿女御との間に生まれた不義の姫君と出会う場面（巻八）では、

昔の細殿のころ、御しるべにはあらで、ただおほかたに語らひならし給へりし少将といひしぞ、声すなる。

〔中世王朝物語全集21〕一九二頁

と表現される。これらの記述により、密会の際にはこの殿舎の女主人が女房の空間である細殿に赴いたことが暗示されている。奥深き所で行われるべき秘め事が人目に付きやすい細殿で繰り広げられるという展開は『源氏物語』の賢木巻における朧月夜の君と光源氏の密会の焼き直しである。細殿は物語の中で読者にスリル感を提供する格好の空間となっている。

なお、この物語ではまた別に細殿が登場する場面（巻四）がある。

秋ごろ、皇太后の宮、女二の皇子具し奉りて、例のほどなくて出でさせ給ひぬるに、一品の宮は、なほ一所にてもこの御方ざまさうさうしきを、しばしもおはしまさなむとどめ聞こえさせ給へるひまに、例の心をまはしてうかがひ歩く権中納言、今はなべての上人にうちまじれるほどにもあらぬに、夜深き忍び姿も見苦しければ、麗景殿に籠もりおはして、いたうふけぬるにぞ、あながちに忍び入り給へる。この宮の御乳母、大弐の君とてむつまじうさぶらふを、もとよりいみじ

ういひ語らふ伸なれば、夕闇のほどにまぎれ入り給へり。端近き細殿もそらおそろしけれど、例のいみじきことを恨み続くるに、この人もいとせむ方なく思ひわびたり。

〔中世王朝物語全集20〕一九三（一九四頁）

右の引用は一品の宮に思いを寄せる権中納言（もと宮の中将）が宮の乳母である大弐の君に手引きを求めめる場面である。中納言は大弐の君の居る細殿に紛れ入っている。ここでは『源氏物語』賢木巻の表現が繰り返される。細殿は大弐の君の居所であるが、身分に外れた忍び姿を人に見られたくない中納言とそんな彼を迎え入れた大弐の君には恐ろしく感じられたという。同じ表現によって、読者は『源氏物語』の光源氏と朧月夜の君の物語を想起することになるだろう。

以上のように、『源氏物語』以後、細殿には密会の空間というイメージも付与され、端近な空間であることが当事者たちに心理的不安を増長させる結果となっている。

おわりに

これまで見てきた用例から後宮の細殿は、女房たちが住まい、彼女たちと会話や恋愛を楽しむ男性官人が頻繁に行き交う華やかな空間であったと言える。細殿に質の良い女房を取り揃えることがその殿舎の女主人たるキサキの評判にも繋がった。

そして、物語の細殿は主人公と正体不明の女性との恋愛の場ともなる。物語ではないが歌集『本院侍従集』では男性の問いかけに対して素直に答えず男性を試すような歌を詠みかける本院侍従の姿が確認できる。『源氏物語』の朧月夜の君もまた男性の心を

試すような挑発的な歌を詠む女性として登場する。『源氏物語』以後の物語でも細殿を舞台とする恋物語が挿入されるが、そこでも先に歌を詠みかける女性たちが登場する。しかし、彼女たちの性格には朧月夜の君に見られるような挑発的な要素はなく、自らを「何ならぬ身」つまり人数にも入らない身と謙遜する控えめな女性として造型される。この点についてはそれらの女性が朧月夜の君とは異なり、細殿を住まいとしていることに注意すべきである。現実社会で女房の局であったことが影を落としているのではないかと考えられる。

さらに、『源氏物語』では朧月夜の君と光源氏の再びの逢瀬の場として設定される。一度目の偶発的な出会いとは異なり、二度目は意図的に用意される。そして、この展開が『我が身にたどる姫君』に影響を与える。細殿は女房の空間としてだけでなく、物語の世界では密会の場としても機能していたと言える。

平安後期以降、内裏は里内裏に遷されることが多くなり、その繰り返しで本来の細殿の実態も不明瞭になっていったと思われる。冒頭でも触れたように、細殿は『河海抄』の段階ですでに注釈を必要とする空間になっている。そのような中、王朝物語の中の細殿だけは王朝世界を色濃く残す空間として以後も使用され続けたのである。

注

- (1) 萩谷朴「枕草子解釈の諸問題」(『国文学』昭和三四年五月) ↓
『枕草子解釈の諸問題』(新典社・平成三年五月)
- (2) 石田穰「二・細殿について」(『文学論叢』四六・昭和四六年)。細

殿の位置については、金子元臣『枕草子評釈』(明治書院・大正一〇年六月)や増田繁夫『和泉古典叢書1 枕草子』(和泉書院・昭和六二年)の補注、論文「寝殿造における寝殿・対の屋以外の建築物」(倉田実編『王朝文学と建築・庭園』竹林舎・平成一九年五月)でも説明される。弘徽殿細殿については池浩三『源氏物語―その住まいの世界―』(第三章清涼殿と後宮)(中央公論美術出版・平成元年九月)でも触れられている。

(3) 『河海抄』は玉上琢彌編『紫明抄・河海抄』(角川書店)を参照。『河海抄』を含む古注釈の説については、川島絹江が「弘徽殿の細殿考―『源氏物語』を読むために―」(『講座平安文学論究13』風間書房・平成一〇年一〇月)の中で検討している。

(4) 鈴木温子「廊の戸」からの覗き見―『源氏物語』の「廊」考―(『駒澤國文』四二号・平成一七年二月)を参照。

(5) 金子元臣『枕草子評釈』(前掲注(2))でも『枕草子』六三段の細殿について「廊のことをいへど、こは殿舎の裏向の簀子に沿ひたる廂の間の局なり」と説明し、細殿が「廊」を指すものと「廂」を指すものの二種類存在したことを述べる。

(6) 三田村雅子「枕草子の〈風土〉―意味―からの脱出―」(『枕草子表現の論理』有精堂・平成七年二月)三〇五頁。

(7) このことは黒木香「清少納言にとつての登花殿の細殿と一条今内裏の小庇」(『活水日文』三五・平成九年一二月)でも考察される。

(8) 『枕草子』第一〇〇段には東宮・居貞親王(後の三条天皇)に入内した淑景舎(定子の妹原子)が定子と対面する場面があるが、その段の記述には、「登花殿の東の廂の二間に、御しつらひはしたり」(九九頁)とある。この記述によって、定子の御所を登花殿と特定することができる。ちなみに、この対面は長徳元(九九五)

年二月十余日（底本勘物によれば一七日夜）に行われている。

(9) 『新日本古典文学大系28平安私家集』「公任集」の脚注を参照。

(10) 伊井春樹／津本信博／新藤協三『私家集全釈叢書7公任集』（風聞書房・平成元年五月）。

(11) 朧月夜の君の歌が異例にも女の方から詠みかけた贈歌であったことは『新編日本古典文学全集』のこの箇所の頭注に説明がある。また、高木和子『女から詠む歌―源氏物語の贈答歌―』（第一部代作歌の方法・第一章光源氏の女君の最初の歌）（青簡舎・平成二〇年五月）の中にもそのことに関する指摘がある。

(12) 日加田さくを／中嶋眞理子『私家集全釈叢書・本院侍従集全釈』（風聞書房・平成三年七月）。

(13) 前掲注（12）書によると、穂久邇文庫所蔵本、静嘉堂松井文庫所蔵本、書陵部本、山口県立図書館所蔵本今井似閑本、新校群書類従所収本、新編国歌大観所収本、龍谷大学写字台文庫所蔵本、神宮文庫所蔵本、京都大学文学部附属図書館所蔵本、京都大学所蔵本の各本が「ほそ殿」と表記している。

(14) 桑原博史『講談社学術文庫・とりかへばや物語（一）全訳注』（講談社・昭和五三年一〇月）。また、藤井由起『とりかへばや物語』にみる重層的交換―麗景殿の女と吉野の姉君―（『愛知淑徳大学論集―文学部・文学研究科篇』第三二一号・平成一八年三月）でも言及されている。

(15) このことは『日本古典文庫・有明の別』（昭和三十三年五月）の中村忠行による解題でも触れられている。

(16) 『我が身にたどる姫君』の麗景殿女御と『源氏物語』の朧月夜の君との類似性については武久康高が『我身にたどる姫君』の麗景殿女御考（『高知大学教育学部研究報告』平成二六年三月）の中で指摘している。

(17) 細殿が密通の契機になる例は、『有明の別』にも見られる。左大臣（表向きには主人公の子）は宣耀殿女御のもとに忍び入るが、その際前もって細殿の女房（少将）と関係を持ち、彼女に手引きをしてもらう。少将との出会いの場面は以下の通り。

思ひ乱るる程、しばし立ち聞くに、細殿のわたり、さだ過ぎ見苦しうは思せど、とばかりえ立ちのかず。しばし立ち聞けば、いと若きけはひして、ただ此もとにうち臥すなるべし。
「ときはの山」など独り言つ。

（大槻脩『在明の別』三〇三頁）
この辺りの表現も『源氏物語』の朧月夜の君の登場場面と似通う。

【付記】本文引用に関しては、本文中に特記しなかったものはすべて『新編日本古典文学全集』（小学館）による。

（あまのひろみ／九州産業大学非常勤講師）